

# 研究所だより

第366号  
2016年 10月12日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015

“だれかさんが だれかさんが だれかさんが 見つけた  
小さい秋 小さい秋 小さい秋 見つけた  
目隠し鬼さん 手の鳴る方へ すましたお耳に かすかにしみた  
呼んでる口笛 もずの声 小さい秋 小さい秋 小さい秋 見つけた”  
日本の童謡 『小さい秋見つけた』



## ○第4回教研推進委員会

10月6日（木）に第4回教研推進委員会を開催しましたので協議内容について報告します。

### 1. 第66次土佐清水市教育研究集会・一日教研振り返り

#### (1) 午前：講演について

##### 【西部地区】

- ・講師の教育実践に基づいたお話で、時間いっぱい熱心に聴くことができた。
- ・話し方も上手で、引き込まれていき、時間が過ぎていった。
- ・ほめることと、命に関わるなど本気でしかなければならないことのかねあいも大切である。
- ・子どもたちは、どの子もほめてほしい、認めてほしいという思いを持っている。「ほめて伸ばす」ことを、学級でも、学校でも大切にしていけると良い。
- ・講師については、人物、内容については申し分ないものだった。学校での教育の上で大切なことがいっぱい話された。自ら振り返る上でも、今後子ども達に向き合う上でも参考になることが多かった。講演の仕方についても聞いているものが集中できる仕方だった。
- ・厳しい環境が故に、生活の荒れた児童に寄り添っている先生のお話が聞けて良かった。
- ・共感できる部分がたくさんあった。
- ・子どもの百の標語に感銘を受けた。
- ・「ほめる」ことについて見直せた。

##### 【東部地区】

- ・良かった。聞きやすかった。
- ・自分達がやるうとしていることと重なっていて参考になった。
- ・具体的な内容で良かった。(二学期から活用できる)

##### 【半島地区】

- ・菊池省三先生の参加型の講話は、大変わかりやすい内容で、教育とは「子どもを育てる」のではなく「人間を育てる」視点が重要なことを確認した。児童生徒の課題は即ち、教師の課題。児童生徒の学力向上には教師の指導力・児童理解力の向上・鍛錬が不可欠。教育の原点を再確認した良い講演でした。今後の学級経営、教科経営の参考になりました。(テレビ内容も視聴したかった)

##### 【中央Ⅰ(清水小)地区】

- ・講演が良かった。
- ・それぞれが研修できて良かった。二学期こそは「ほめる」頑張ります。
- ・菊池先生の講演、2学期からの指導に活かせる内容だった。
- ・具体的な実践を学べて勉強になった。

##### 【中央Ⅱ(清水中)地区】

- ・良かった。
- ・菊池先生の情熱が伝わってき、二学期への活力をもらいました。

#### (2) 午後：各部会について

##### 【西部地区】

- ・どの部会も熱心に教材研究等ができた。

##### 【東部地区】

- ・内容的にそれぞれ充実していた。
- ・フィールドワークは暑すぎた。
- ・案内の時間設定と当日の部会の時間設定が違っていたので午前中の会の終わりに午後の時間について伝えてほしかった。

##### 【半島地区】

- ・養護教諭も事務職員も教科・領域に関する研修会に出て研修する機会があってもいいのではないだろうか。
- ・授業内容(「語彙力マップシート」の使い方)について検討した。(国語部会)
- ・高知県人権啓発センターの山本先生の講話が研修の中心。基本的な課題を考える機会になった。「高知県人権教育推進plan(決定版)」を再度見直し、学校教育活動全体を通じた人権教育の推進が必要である。特に同和問題について系統だった指導が重要だと感じる。県人権啓発センターが発行している「差別をなくするために」に掲載されている「『人権の世間』をめざして」近畿大学奥田教授の講演内容が素晴らしい。ぜひ、直接講演を聞きたいと思った。(人権部会)
- ・シオパークの話もあり、地域の教材で学習する楽しさが見られたし、小学生を対象にした楽しく興味を持つ実験ができた。(理科部会)

##### 【中央Ⅰ(清水小)地区】

- ・部会も時間いっぱいすることがあり、学習になった。

##### 【中央Ⅱ(清水中)地区】

- ・時間的にも良く、良い学習会になっています。
- ・テーマに沿った学習ができた。
- ・会場が中学校だと便利でした。

#### (3) 来年度に向けて

##### 【西部地区】

- ・実践に基づく話ができる講師がよい。
- ・参加人数について、研修が重なる事もあるが、早くから日程が決まっているので、一日教研を優先してほしい。1名でも多くの先生方が参加してほしい。また、内容によって小中学校の教員だけでなくもっと多くの市民に呼びかける方法を考えてもいいのではないだろうか。

##### 【東部地区】

- ・期日を8月後半水曜日に戻してほしい。
- ・防災研修と重なったので、日程調整が必要である。

##### 【半島地区】

- ・菊池省三(教育実践研究者)もう一度聞きたい
- ・島田妙子(株式会社イゼット代表取締役、ファシリテーター、AMキッズインストラクター・トレーナー)
- ・村川雅弘(鳴戸教育大学大学院学校教育研究科教授)
- ・奥田均(近畿大学人権問題研究所教授)
- ・その他人数が少ないようなら場所を変更してもいいのでは。(中央公民館など)

##### 【中央Ⅰ(清水小)地区】

- ・今年のように即実践で使えるような内容がよい。

##### 【中央Ⅱ(清水中)地区】

- ・今年と同じような内容の講師を。菊池先生を再度。
- ・矢野大和さん
- (おおいだ観光特使、大分県人権問題講師団講師、大分合同新聞文化教室講師)
- ・田中博之さん(早稲田大学大学院教職研究科教授)

## 2. その他(当面の予定等)

#### (1) 半日教研：11月 9日(水)

各部会「授業研究」を中心に計画・案内をお願いします。

④：「旅費」は、学校配当旅費でお願いします。

#### (2) 第5回教研推進委員会

期日：12月 6日(火) 16:00～

会場：教育センター



## 〈委託事業：研究協力校公開授業-清水中-〉

～平成28年度高知県実践的防災教育推進事業～

期 日：9月15日（木）3、4校時

指導者：大木聖子先生（慶應義塾大学 環境情報学部 准教授）

学 年：3年生

題 材：「避難所とその運営について考えよう」



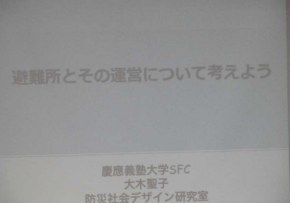
清水中学校では「平成28年度高知県実践的防災教育推進事業」の指定を受け、南海トラフ地震に備えた防災教育の充実を図るため、関係機関と連携しながら防災教育に関する指導方法等の開発・普及等に取り組んでいます。また、この事業の一環として今年度も大木聖子先生（慶應義塾大学環境情報学部准教授）をお迎えして公開授業や防災講演会を行っていただいております。

今回は、清水中学校が震災後避難場所となることを想定し「避難所とその運営について考えよう」の講話と4コマ漫画教材を用いたワークショップを行いました。

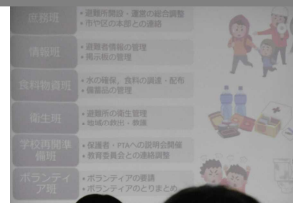
講話では、初めに地震発生分布図を見せながら、地震は毎日発生しています。昨日までに日本全国でこのくらい発生（1日300回、5分に1回発生）しています。阪神淡路大震災や東日本大震災の時の映像を基に、安全な所で生活していても、震災による断水、停電、建物やブロック塀の倒壊による生活道の遮断等で、自宅での生活が困難となり、やむ得なく避難所生活を余儀なくされます。「避難所で最初にやることは何なのか。」「避難所の運営は誰がするのか。」など大木先生の話の後、20班に分かれ「2020年に地震発生」を想定して、ワークショップに移りました。

4コマ漫画教材は、過去の災害におけるある困った問題を4コマ漫画形式で表現している防災教育の教材です。4～5人のグループに分かれて、問題に対する解決策を考えます。4コマめの登場人物のセリフが空欄になっていて、解決策を他者に伝えるためのセリフを考え、最後にグループごとにセリフを発表するという流れになっています。避難所運営は、自治体の避難所運営マニュアルに載っている係班が災害時に直面しうる問題を取り上げています。係班は、庶務班・情報班・衛生班・食料物資班・学校再開準備班・ボランティア班の6班から成っています。教材を各班に配布し、話し合いが始まりました。最初は、緊張もあったようですが、様々な意見を出し合い、活発に議論を進めていました。その後チームごとにセリフの発表をしました。（時間の関係で数班だけ発表）セリフ内容は、中学生ならではの柔軟で多様な発想が多くありました。

① テーマ設定



② 6つの班分け



③ 話し合い



④ 4コマめセリフ発表



## ○学習指導要領改訂とアクティブ・ラーニング

### 1. 今学習指導要領改訂の狙い

これまでの改訂では教育内容やそのレベル、卒業に必要な単位数などが議論されてきたのに対し、今度はそれに加えて授業の在り方、指導方法までもが改訂の対象とされている。

### 2. キーワードはアクティブ・ラーニング

今回の改訂では、授業の在り方や指導方法についての改革が図られることになっているが、キーワードは「アクティブ・ラーニング」だと言われている。これまでの日本の学校の授業は、児童・生徒が揃って教壇に向かって座り、教師が一方向的にレクチャーするのが一般的だったが、これからは、児童・生徒が主体的・協働的に学ぶ学習に変えようというのである。このため、全国の各学校では今、教員が「アクティブ・ラーニング」とは何を意味するのかを理解するのにおおわらわになっている。

### 3. アクティブ・ラーニングが意味するもの

「審議会のまとめ案」によると、次期改訂の視点は、子どもたちが「何を知っているか」だけでなく、「知っていることを使って、どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を」ということであり、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるものすべてを、いかに総合的に育てていくかにあるとされている。

そのうえで、「次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育てるためには、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子どもたちが『どのように学ぶか』について光を当てる必要があるとの認識のもと、『課題の発見・解決に向けた主体的・協働的学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）』について、これまでの議論を踏まえつつ検討を重ねてきた」と述べている。さらに、「次期改訂が学習・指導方法について目指すのは、特定の型を普及させることではなく、次に述べるような視点に立って学び全体を改善し、子どもの学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することであり、教員一人ひとりが、子どもたちの発達の段階や発達の特性、子どもの学習スタイルの多様性や教育ニーズと教科の学習内容、単元の構成や学習の場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることである」と述べている。

そして、アクティブ・ラーニングについて下記のように授業改善の3つの視点が示されている。アクティブ・ラーニングでは、「フ・ロム」「イ・タラケツヨク（相互作用）」「リルケツヨク（振り返り）」が、適切に学びの中に位置付けられるかどうか重要であり、これらの視点で授業を改善することで、今まで以上に高度化された学力の育成が期待される。

- ① 習得・活用・探求という学習プロセスの中で問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか。
- ② 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程ができてきているかどうか。
- ③ 子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

### 4. 学校現場での理解の徹底が先決

熱心に研究し先進的に授業に取り入れようとしている教員の多くが、最初に着手しようとしているのが授業の形態で、児童・生徒によるグループ活動やディスカッション、ディベートによって子どもたち自身で考えさせようとするものが多い。つまり、形式を考えることから入ろうとする授業が先行しているように思われる。審議のまとめ案でも特定の型を普及させるのが狙いではないと述べているように、実際は授業形式の変化ではなく、教員がどのような発問をして児童・生徒の主体的な学習を促すかにかかっているとよい。まさに教員の創意工夫が期待されているのだ。

〈参考・引用文献：月刊日本教育9月号〉



☆第1回学力向上検討委員会（10月7日・金）委員長：山崎校長（下ノ加江小）

7日(金)に第1回学力向上検討委員会が開催されました。初めに組織の設置要項第3条（組織）（4）「その他教育委員会が必要と認める者」を確認し、今年度より新たに構成委員に清水小中学校の研究主任・岩井先生、山崎先生が委嘱されました。委員長には山崎校長、副委員長には岡崎校長が選出されました。

協議では、経年比較（全国・県・西部地区との比較）を基に市全体の傾向と分析を行い、定着状況等の把握と学力向上のための取組についても意見交換をしました。各校ではすでに校内研で分析し、課題の確認と課題克服に向けて具体的な取組が実践されていると思いますが、検討委員会で下記のような意見等が出されましたので、校内研等で協議していただき、生かしていただければ幸いです。

1. 分析結果・傾向（正答率40%以下）

（算数B・数学AB）

全体的に「理由を記述（説明する）する、正しい理由を選択する、数学的に表現する、文字式に表す」等に課題が見られる。

中学校：数学部会で検討、「関数」についての指導の工夫をする。定期的に定着状況を確認していく。

清水小：「全国学テ・標準学テの再テスト実施」

〔ねらい〕

- ・各テストで誤答が多かった問題や関連する単元の復習をする。
- ・再テストを通して成果と課題を分析し、今後に活かす。

〔内容〕

- ・誤答の多かった問題を国語・算数で2～3問程度とする。

◎「算数日記のスタンダード」の作成・実施

2. 今後の学力向上に向けた取組みについて

- ・成果のあった具体的な取組等を紹介してもらう。（実践共有）  
各校の改善策（課題克服の取組）とその振り返り（検証と評価）の実施（校内研等で確認）  
様式については、昨年度検討委員会で提案した取組状況の様式を基に再度作成・提案します。
- ・小小連携（交流会の充実）一中1ギャップ解消に向けて
- ・各校、分析（問題の趣旨や傾向、誤答等多様な視点で）結果等を基に授業改善に取り組む。

3. 家庭学習について

- ・家庭学習の充実：「家庭学習は毎日やるのが大事という原則」  
低学年：時間短くても集中する方が大事 → 少しずつ時間を増やしていく  
家庭学習の習慣は、毎日の積み重ねによって定着するものです。学校と家庭が力を合わせて家庭での学習習慣を身につけさせ、子どもの学びに対して興味や関心を広げていくことが大切となります。特に、家庭学習の習慣づけに必要なのは、ノートと鉛筆、家庭の協力です（規則正しい生活習慣の定着）。  
※中村南小の取組：課題については全学年統一して取り組んでいるそうです。  
詳細については中村南小にお問い合わせください。

4. 平成28年度高知県学力定着調査に向けて

実施期日：平成29年 1月11日（水）

内 容：事前に示されている(配信済み)「出題予定範囲」を再度確認してください。

《ある新聞投稿より》

30代後半、公立中学校の男性教諭です。やっかいな問題のある生徒にどう対応したらいいか、ほとんど困っています。それは授業を受けず、保健室のベッドに寝に来て、自分勝手に時間をつぶしている生徒です。「疲れた」もしくは「頭が痛い、体の具合が悪い」などと理由をつけて怠けています。「だったら、早退して医者に診てもらえ」と言うと、「少し経ったら治るかもしれない」などと言って、結局保健室にずっと入り浸りです。養護の先生からは「文句を言ったり、自分勝手なことをしたりして仕事ができない。担任の先生が何とかして」と半ば責められています。ですが、どうしていいのかわからず、そんな日が続いています。「しょせん、よその子」と、自分には何ら関わりのない生徒のことで悩んでも仕方がない、と思うようにはしているのですが、それでもイライラはおさまりません。こういう生徒はごく少数で、ほとんどの生徒はいざとなったら話せばわかってくれます。だから、ほとんどの生徒のために力を尽くすことだけ考えようと思うことが常にあります。考え方をどう切り替えたらいいのでしょうか。イライラして腹立たしい気持ちから解消されるのでしょうか。

さあ、皆さんならどう考え、どうアドバイスをしますか？

